

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

「さきさん」のご冥福を祈る

昨年、9月26日付けで、以下のメールをいただいた。差出人は「さきさん」こと、山崎佐喜治さん。

大西 さま 信毎の記事(全国調査)見ました。船窪～蓮華、マイナーな山縦走、羨ましかったです。実は私もまだでしたので。今年は、春頃から体調を崩し、入院したり通院したりのくり返しで、かわらばんの返事もできず、ほんとに申し訳ない、情けない状態です。そんな陰の読者ですが、今後もよろしく。 山崎 佐喜治

「さきさん」と言えば、長野県の高体連登山専門部の古いメンバーには思い出も多かろう。大町北、塩尻、田川など中信地区の高校で山岳部の指導を歴任されてきた大先輩だ。そして、何より、1977年度に「中信高校山岳部年報」の第1号を手掛け、以来20年間の長きにわたりその編集に携わってこられた。1977年というのは私が高校3年のこと。僕は高校時代はバスケット部に所属していたので、この年報には名前がないが、同級生の名前が掲載されている。年報はその後98年から7年間は赤羽康定さん、その後小生が引き継いで今年は38号を上梓するに至った。このメールのタイトルを「中信高校山岳部かわらばん」と名付けているのは、年に一回発刊するこの「中信高校山岳部年報」のタイムリー版というのがその謂いである。「さきさん」あつての中信山岳部年報なのである。毎年できあがった年報をご自宅にお届けすると「ご苦労さん、そしてありがとう」と喜んでくださり、数日後には必ず感想を寄せてくださった。さきさんのややトーンの高いしわがれた声が今でも心に響く。その「さきさん」が1月3日に亡くなった。安全登山を心から願う岳人だった。8年前、年報30年記念誌に寄せてくださったさきさんの文章を掲載することで、哀悼の意を表し、心からご冥福を祈りたい。ここにはさきさんの高校山岳部への思いがあふれている。ぜひ、皆さんにもお読みいただきたい。

なお、今年の年報38号が昨日完成した。「さきさん」に読んでいただくことはもう叶わないが、御霊にお届けしようと思う。さきさん、安らかにお休みください。(スペースの関係でややフォントを小さくさせていただいたことをお許しください)

年報創刊30周年に寄せて

山崎 佐喜治

この年報が30号を迎えるという。まずはおめでたいというべきか。記念すべきことは確かで、この種のものとしては類まれかも知れない。ただ私はこれを黙って喜んでばかりはいられない。というのは、これを手書き原稿で自前印刷・製本した1号(創刊号、1977年)から20号までは私が手がけたものの、その後、これを絶やさないようにと、赤羽康定先生や大西浩先生、そしてこれを周囲から支えてこられた多くの中信高校山岳部の先生方のご努力があつてのことで、それを思うと、その方たちへの感謝の念の方が先にあり、「続けていただき、ありがとうございました。ほんとにご苦労様でした。」とまずはお礼を言いたい。

考えて見れば、30号30周年ということは、当時高校3年生だった18歳の青年たちは今48歳の立派な父親、母親になっているということであり、その子どもたちも既に高校を卒業しているかもしれないということになる。そして親子二代

でこの冊子を手に入れているかもしれない。これはたいへん嬉しいことだ。

私がこの冊子に関わるようになったきっかけは、当時、中信高校安全会というのがあって、登山の事故を防ぐための山岳顧問の先生たちの研究会が行われ、そこに出された報告書が結構貴重なデータに思えたので、当時事務局のあった大町高校のI先生に、年報にしたらどうかといったところ、言いだしっぺのお前がやれという話になり、しぶしぶ受けたのが始まりで、つい20年間も編集をする破目になってしまった。しかし、学ぶところ大で、実は楽しくやっていたのである。

途中、多少の紆余曲折もあって、題名も『中信高体連登山部年報』から『中信高校山岳部年報』に(21号から)変更した。生徒諸君に少しでもこの年報が安く配布できるようにと広告を載せたことに対する反論などがあったからだ。しかし、この年報に大きな理解を寄せてくれる外部の方々もいて、今日があるのである。

手許の20数冊をめくってみると、感無量のものがある。特に10号(特集号・全100頁)では、巻頭に『グラビア・10年史』(アート紙刷り4頁分)を載せていて、その冒頭の写真は、なんと昭和39年(1964年)に白馬で開かれた「第1回中信顧問技術講習会」の先生方の記念写真である。その横には、「第2回中信顧問技術講習会」の白馬大雪渓上での先生方の写真が載っている。この年報の起源を示す貴重な写真で、当時全国に先がけてこの会の基を創られた丸山彰先生(大町・大町北高)のお姿も見える。先生はすでに他界されているが、先生のご指導があって今日の我われがあると、私は今も尊敬している方である。

思い起こせば、この中信地区の高校から、幾多の高校総体登山の選手、国体山岳競技少年男女の選手が輩出したことか。そして選手であったか否かに関わらず、それを送り出した青春の山仲間全体の貴重な山行記録が、皆この年報に凝縮して残されているのだ。

私はいつも、せっかく縁あって山岳部に入った諸君には、山をやったことで豊かで満足のできる人生を送ってほしいと願って、この年報を編集してきた。山岳部の部員が減って部が潰れそうな学校の生徒(「こないのクラブにみんなどうして入ってくれないのか」/旧塩尻高A君など)には、山の良さとクラブの楽しさを精一杯書き残してこの冊子を入部歓迎用に配布したらと励ました。そうしたら次の年、多くの部員が入りましたといってきた学校もあった。

私はいつも思うのだが、人生は山登りに似ている。人生も山も苦勞が多だけ喜びも大きいということだ。私自身山をやり、山仲間を多く持つことで豊かな人生を送れたと思っている。小さいとき父をなくした私は、ほんとに貧しかったから、「人生は自力で切り拓くものだ」とじっと思っていた。そしてそんなに大きな夢は持たずに、小さな成功を一つ一つ積み上げていくことだけを考えた。ところが当時とても考えられないような大きな夢が次々と達成できた。それは、モンゴル、チベット、ネパールの山旅だった。

しかしそれらも、よく考えてみれば、単なる物見遊山の旅ではなく、親しい山仲間を支えられた目的のあるものだった。山を愛するアジア詩人会議の人たちとの交流を深めたモンゴル・ダランザダガトへの旅。長野県山岳協会と中国登山協会・西藏(チベット)登山協会との山岳兄弟協定締結・トレッキングの旅。そして山でお世話になったネパールの奥地(トリスリ地域)への植林の旅などで、これらは決して高い頂に立つ輝かしいものではないが、お金だけで買うことのできないそして二度と同じことのできない貴重なものであった。シルクロードの奥地に入る2回の旅も同様であった。山仲間こそが重要であったのだ。人間、どんな夢でも、それをずっと持ち続けねば、そして努力を怠らなければ、必ずいつかそれが実るものだ。

そんなことをして遅れたが、ようやく今年の10月、念願の『日本百名山』が九州の霧島・韓国(からくに)岳をもって終了した。幼い頃、虚弱児だったことを考えれば、『自分を褒めてやってもいい』ことのひとつ。小さいとか、弱いとか、貧しいとかいうのは、人生の一時(いつとき)の状態であって、長い間に必ず覆され、道は開けるものだ。若い諸君は、この年報をよく読んで友人たちの努力の跡を読み取り、自分に厳しく課して、己を鍛え抜いてほしい。月の夜に、人知れず密かに牙を磨く狼のように。

最後に、この年報がずっとすえ永く続くことを祈りたい。それは、取りも直さず、健全な中信高校山岳部のずっとずっと永い発展を祈ることに他ならないのだが。(2006年12月・穂高商業高校)